勝声出

朱姫し

二度摺

浪花狂歌鑑

増補

佐利集

四編

大阪市南区鰻谷中之丁

加島屋清助

淨瑠璃根本鑑

一名 淨瑠璃刊集

濃華清長重版

目録

一 壷阪霊験記　沢市内の段
二 累物語　垣生村の段
三 忠臣蔵　判官切の段
四 戀女房　三吉子別の段
五 先代萩　竹の子ぐん
六 仝　仝奥のぐん
七 伊賀越　岡崎のぐん
八 太功記　夕部屋のぐん
九 忠臣蔵　書墨のぐん
十一 千本桜　道行のぐん

十二 清水 十郎 弁慶
十三 矢口渡し 場の段
十四 阿漕ヶ浦 平治左衛門
十五 金比羅利生記 志渡吉の段
十六 伊勢音頭 油屋のごん
十七 時雨傘 岩井風呂の段
十八 北四郎 勘助住家の段
十九 おかち 与兵衛 八百屋のごん
廿 忠臣義士傳 赤垣出立の段
廿一 伊賀越 道中双六 遠州灘の段
廿二 亀山敵討

壺阪寺段

サハリ

目のあるうへにそこにしてくれるこのごとくにかすかなれどもこの世にはかなきこの浜辺のあなたこなたの中にあるそこ
みらこそふうふ
未来までもふうふとあるこそ

汁ノ中ニ赤ノ目ヲ
流シ入レ十二時ニ経ヲ読ム
時ノ七ツ半ニ蛇ヲ生ケリ
抜出シ入ル流厨ヲ三ヲ
出ジ其ノ外ニ出ヒ入レ刑

実ノ如クニ入ル殺ヒ
経ヲ読ム時ニ今迄
抜入テ長ク孔ヲ開ク新ニ
不ル男ガ子ノ今ノ赤
ノ云ル私ノ孫ガ云ノト

くぐつたるうへ矢ぐるの中の
ゆびぬきなり

恒生おの後　サくり行キ

ゆいの神法ゑ門の中を新る
ゆとこそ長うしがやをいく

ゆりや形ゑうしが新なふ
続とえすあまの心を新る
せぞ新ゆふ可也ぐつてい
ゆしこふ情ゆをて情ゆ
ゆぞ手ゆてゆゆふいふて

はせて下さいませ又婦人
相談の儀は兄様の妹と共に
直ぐ帰りの形云の者
来るべき人の名を聞ぐ為で
要事同様と存じて居ること
なり
いや幼面目ない有
事度ぶつ新ぐ合さまふ
ずいてまと同じ為の縁川
為投てあるいまで

連歌師宗祇ごとの川
たつたゝひの切戸夜頃宇
治の宿でいまゝいかゝせ
ん方のかゝ者共ゝそれ
外の氣かりつゝもが逢ひの

種とかりあふ浦まねでこゝ
ん方不可思議あそ打ちの
間の松上まそこ法度
くさへ入ぞりう法つくそ

梅川忠兵衛封印切乃渡　夕勇女章

サア二三味線と文雀のむりそ
今のうつけて仕舞ふ色
と世の人のやさたれば
ひがりの仕方その通ぞ
物も後もえひうたこへ
いのわかげ
今投ぬいの沙汰
男の方が役のやふざる
を内ハ仕ぬけのふても
ろうそ方れば仕ぬそ
かのびりゃふ役の根

怪まぶうめいてふいとふ
はしかの事をもつて指ゆびとも
言ふ小うしなせそのびの首ゆび
はしかもあつけそこのあかけり

二言子別の段

ものそこ出そふの後三言
きくゆやりうぶをして同
とりに出えまつべて極め
付えそびしげが後ひげ
ゆまを変こりむこのやみ川

でけが仕ゑんが毎日毎日やう
ゑ乃ふい板がいふいと仕病
ゆ已三日目三日目ゆとんで
ゆ乃ふれ乃ゆてたる毒乃者
へいどふ板ちゃれ日ゆ

りいの乃ゆいふ已やう三
百人の代ゆがゆの最ど乃
ど武蔵ふんどふ乃ど
投仕て敗已ど懐中ゆ乃合
一ゆ十三京ゆこ也已ふ

ゆ

ねて居やうにしかるべからず

三ヶ年の内に病しばしばおこり

でもあるべし

しかるに病ふと

ふといねかはしをしてあ

ゆるまことをそれ作法の

たとへば物やわらかなるでも

ゆがめ紙の食ふ所ゆがめ

ゆがめ物をかれ

ゆえに居ようと

ゆえにとうとしをもの

ゆえ紙をこの人に居ら

かかのれ家さいぞぶそ人
子をを教てゆのやいふぞ
其この月清すやをのこ
こがれて歌ひ

先代
中川閑子談

接客

まぐ頑もの寡者代者
が傍のが仰いがどぶ思
がるの子松が泉てむる
鏡の三ッ毛りこがが付
術が乳の人ぞりとこ人へ

ひとつゞけ恋を殺ひまう

仝　奥

わるくとの縛り乳房の
感とろかる忘れぬ
ひとつの雑巾の乳の人

仲間を抱き寄せ
ものの
仲賀桃

岡崎乃まん　奥サハリ

可愛や盛りの黒髪とやこの中の
ふゆでる中まさ裏新ハ

人稱代名詞の男性のが
うるさいこと夫婦を
附ける尼の乳で製造
後乳房一日の乳が多く深素
分後多付と元の白菌と

素深の深要せんじても
効わる病の心がそぶぬ
れれ数れてと分と男け
深ぬ乳と返れ役ぶてる
表ぶるて緩と離こ紐

乃忠祖父合も化生の縁
子小別と成れ小童提の
母の乃連関役人の我
姫関西くも切るいそ中仙
乃の業門老孫子連て

乃世よと姫小歌て乃ーと
逆子坂小迷迷末末の
妻面様本清で成と父母の
連も涙分結生言小むわこ
仏小むわこ我子冥逆へ

乃至〻志津る唐本る和
合て志れ仏表氏の礼

太切記

夕顔棚乃段

抜文ナシ

老の泪ハ初雨に花ぞ乱る
袖もいそくの時び痛ハ

出る新い上袖の裏相久る
初めく対こ只恋ゆと十次第
乃ハ初陣ハ対死と覚悟極
ひ鞍ハ鞍ハ元ハ美色と知せ
ハ夜明ハ中ハ蓋ハ夜ハ泣

樵の弟ふ之よりそれのれ
撥婦のいろ母門ふるこめの
盃のそれ孫ふ大ふ公ぎ見
樵い九鉄の国元や十ぶう
神陣の猛の役い盃て死嫁

三盃二の歩ふと数白園の
孫嫁ぶふそら連て三人い
奥の一石へふる

忠臣講釋

七つ国ふ切　ケイトキ

役ぶふ歩ふ懸ふて去東

可愛ふ[illegible]の[illegible]の[illegible]
出来て子い肌にて[illegible]
つ[illegible]家[illegible]の[illegible]
が[illegible]ば[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

男[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]む[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ここ相模の国のそば付て
あが流れしたと探せば
遠ありてされのふと絶る身
身も無の一杉の花の
絶かの切身ちぬ秋の秋

の秋をちぬ流れとさへ思ふが

千本櫻道行

鶯の鳴とれ新とよそて上ぶ
思の人とそ新孫西東へ
北の国のいの春浦風

めくれ紙と宿屋浦の光
上を主人が宿屋の浦に
りゆかりてそ多ひ人と来た
笹と紙の実はのひそ
巳月又伝が忠勇り

殊に主人新方のひそ
樽の浦海の紙平家の
赤絵法の白紙添成
紙アラ巻と有りの紙
刀そ何の平家の

伯耆国三朝温泉の名所
くさぐさ雅なれば見ぬ
間のやうくぞと本の家
老ひびかりや春も三朝の
谷ぐちもいつと法のてらど

おてらの力と松の力の
ふれば極楽ゆきたまふ
かうの海の春の春
つぐれと
浮元ようの見てらの
仏殿のたてそうるうし

ちかい根にいの血で墨の跡を
しるしをつけてから豆よりうく。
四角豆たばくむんぞと
跡をしるしてあるから庭石か
ごろりと社殿の後ろと云イ

はまぐりの貝こそ法はれ
いとはいそ貝ひろい入れをいて
働いて法伝者のれて月
条書の跡をうけとうふさぐる
こはなぶをを附の車象の方

ゆいがの漢字は
数字と仮名もあるが
て数字を使わない
ゆえに
ゆえに
ゆえに

たがひにいとおしみあいて
ものをいはれぬ
なかにてはなれがたく
なりぬるなり
の
ものをいはぬ
なかにてはなれがたく
なりぬるなり
の
なかにてはなれがたく
なりぬるなり
の
なかにてはなれがたく
なりぬるなり
の

さてかの孫兵衛殿、長人の
家来に宮と申す仁、
世に清平寺志摩の介殿と
立ち合ひ、さのうちに
過ぎうつる程に付き、
清平寺奥へ来たりて
もの言ひ、
強ひて家へと来たる程
そのかの清平寺
何歌かそのうち

刀追て切て捨て再び出て
首尾無ふさて二の足目付も
為すの結家宅九月に成
色々の手を尽て今度
逃ることを会り得ず

漸と逃出て捨ぬ乃あり
げのの者よりこれを聞て
あるに曰く七里の七里さと
七里て刀を後に捨て逃ぬ
逃ぶだりの者をもてこの

可愛やこゝろをせめぬ人の
と分てもゞ三度情のこれ程う
矢口河情男設　ノトキ
物そいふてもゝ分ぬ情ひ法
うらゝ哀れ世でゝ涙を反
めくらん
恋縁とは程程多く
かゝるてもゝ分ぬ
ゞでかとゝふ云ふ事
ゆそいと厭れ情を
生涯こゝ人の嫁が

先立て会釈もあれども
かたもなしふかとんりやうそ
れをのべて見せ情極て死まさる
姫有もとさとりかたもなし
其事ゆゑにそこれを
とくとくと立ておかれ
四方のかぶ四の字ふ役と
いふ事なり

手代屋敷之段　クドキ

コン縄ゆよとかれ神ゆめ

宮門い三寸縄のふいてゆ
りけるかまきゆ長さ八尺縄付
の宮門ゑ清めてうるふびんさ
我は湯ゑの泥殺や鎌の
鎌ゑりとゆひるさ清の面
ゑ清めるゆるとゆ清に安て後で
ゆりゑ宮市平さひりさの後
わがこゆ後ゑ後ゆ後ゆ
冥道宮ぐ一のんぐ後辺と
べて別と行

志渡寺縁起

クドキ

ひいてくも程の興い名所を
拝がむの仏果の報恩いそ
給れがしまのこうがうの
こよ長久を祈る事も

かう事申乳母も長寿を
願ひ奉ると出家ふも信士
長業ひいの仏恩をふ
小僧くとも孫の表にいまが
立に出る憂目いのそ

伊勢音頭

油屋乃宗八　サハリ

とい云かぐらの一枝流るこの
わざ爲る別と知るこの種
岩に沖しぶきふわかるこそ
思て行ば浮世の日新が

えらぶのむごつきかいどう
のくかれをこうとはてさ
ひ林
ぬかきぐ歩いと恨ぬか
くれ春る

時雨傘
岩井風俗　サハリ

月
こりこ三人が世話をるうまれ
と梓が月に寄ぐ
は縁もかの君の海岸
を上に文ぬれ巻ぶりけ
ぬいく恋ゆの御浦

いさぎよくとこそ海のそこでは
濤の藻くらん

十四寿

勅助伝家譜　ノトキ

ものと本ゴのわれ海人とそれど
弦の弦のうつれ結びい

ひごやつれかとわすれ後者ふ
あるつて海人のかりこうくも
そこの風のうそ海者ふ
うと海数ハ山やとよりけ
房花よてあやこうん

めぐまれ
殺やうんこいそもゆる
因果のそやしる惱いまわか
けれは我子の乳が出ぬ
こゝ
ひとの母くゝ嫁へたの
のとゝも産へ乳と又涙

ちうの白雪ひかの浦殺八
宝地獄と春が月にこゝ三
ちうど和とゞ物びりゆけは
れなと会方にゞるこゝか
対いえへコリヤかくこと我子と

孔雀花の咲こぼれ
這松の

お千代半吉噺

八百屋乃段

サハリ

ひのもとは仏法世でいとゝ
縁りと法花の教の教乃

それ世間の人のまなびかろ
ふの今さふの今爲さえの
世樣爲つとりの家中
孔子何れそもそもぞろて
ろてとこりやまんで爲

こゝかしこの須と実と様ぶ
新の表表いづれも家に稚成人

赤恒出立段

ノドキ

かゝいいさで其上くしに貧
物くのかゝ食もそむれかゝ。

恨んで表こ中変もかゝ
役けれいこ家物家主のか家
でかゝかゝ別こうかもこ
まいかゝ表ぬ様こくこ
はえこれば人こもこ人表こ

かんめい
無明の酒のゆへにそ紙衣
たゝむ
たゞ一人
たゝ一人
たゝ一人
たゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文永弟子つの勢でも侍べ
人の後海水しい侍べ
而し中はひとつ実の外
小弟組と義経幸者中さふ
外の幸中は漢多百信つい

漢勢組と漢雅雅ま実の
乃や嘗れの欲れ外ぬ実
組は外ふと法ってあそ
くと漢中しそ外この行
乃国ぬつで郎ぞ五年月

明治三十六年八月二十日印刷
公　年八月廿七日發行

不許複製

編輯兼節刊者　大阪市東区北久太郎町三丁目五十六番屋敷　鶴澤勝右衛門

發行兼印刷者　大阪市南区鰻谷中之丁　加島屋清助